



詩抄II 日々記



鳴瀬羽迦

natural ～天然なる日々～

笑おう
お腹がよじれるくらい
涙が出るほど

きみのジョークが
可笑しくて
可笑しくて

仰ぐ空は青くて
ハリエンジュは黄緑で
風に揺れて
風に揺れて

アンテナ

空にそびえている

淋しくないのかな

眺めはさぞかし よさそうだけど

風にふるえている

飛び交う電波に口を挟むこともなく

黙々と働いている

鳥が時々やってきて羽を休める

背の高い木々の姿も少なくなった町での

君のもう一つのお仕事だね

ちいさなきみ

おとなでいること
いちぬけた
きみといるわたし

いっしょにわらって
いっしょにないて
いっしょにころげて

きみのめせんで
きみのせかいをみるよ

このおもいでが
いつまでも
きみのむねにありますように

このぬくもりが
いつまでも
きみをまもりつづけますように

はるうつつ

あおい そら

まとう はるのかぜ

ふきながれゆく はるのひかり

まだ みることない はなたちのゆめ

たおる きみの おさないては

つみを しらず

和

きみの横に腰掛けて
小首をかしげ本に見入る
その横顔をみつめている

こんな ひとときにすら
ふと 涙が込み上げてくる
そっと こらえて

伝わる存在の温もり
感じる生きている喜び
思う この輪の守手であろうと

私に出来るのはそれだけ
暮しという生活の場で
きみに伝えられることは
みんな伝えよう
よい手本わるい手本になって

そうして ほんの少し未来に混ざる
ここにある想い

生い立ちの町

ちいさな頃に暮らした町を
ふいに訪ねてみたんだ

思い出の詰まった
マッチ箱みたいな団地

解体作業が行われ
姿を消してゆく途中だった
様変わりする町に涙がおちた

故郷のない町ネズミの
心の古里だった

まだちいさな私が住んでいるような
そんな思いがあったのだけど

夢中になって遊んだ
公園のブランコを漕ぐキィキィいう音も
探検ごっこの空き地の笑い声も
みんな幻になって木霊するばかり

見上げた空だけが幼い日のままに映った
「大きくなったね」と
雲の口はにっこりと微笑み
風の手で頭を撫でてくれた

「ありがとう」
私を育ててくれた生い立ちの町
最後の面影を胸にしまったよ

花の香りに

雨に煙る
街路を歩いていた

甘い花の香り
つと 漂い
夢をいざなう

古びた家並みは
闇夜に隠され
このまま夢に続くように

今 君が此処にいれば
素直に
語れそうだよ

でも 君はいない
振り返っても
君はいない

幻影は
雨音に紛れ

家路を急ぐ
遠くなる花の香りに
夢を残して

_**

LIVE

音になる自分が
身体の芯から

フロアを這う重低音
響いてくる指先まで

吹き飛んでゆく
煩わしさも退屈も
さっきまでの悪夢だって

沸きあがる歓声
粒子のスパーク
弾けて弾けて

音の洪水に溺れる人達
ラストはひとつのエネルギーの塊

求めても切りがないほどの
一瞬の熱
なのかもしれないけど

魅かれる場所
惹かれる瞬間

逃れることできない
逃したくない

瞬間の夢

万物流転

いつもと同じように目を覚ました
いつもと同じように滑り出す一日
いつもと同じように朝食の仕度をする

代わり映えのしない朝食のメニュー
だけど 今朝のお皿のレタスは
昨日のお皿のレタスとは違う

同じに見えても 明らかに違うもの
だって昨日のレタスは もう食べてしまって
新しい房から剥がした葉だから

毎日は同じようなことの繰り返し
だけど 全ては刻々と変化していて
昨日と同じものなど全くない

身体の芯からでさえ 細胞は零れ落ち
毎日 同じようであっても 瞬間の全ては新鮮

それらは目に見えるスピードではないこともあり
人は 大きく変化して気づき
奇跡だ なんて思うのかもしれない

_*

雨上がりの朝

飛べずにいた鳥たち 雨は止んだよ

膨らませた羽毛 羽ばたかせて

もうすぐ朝が来る まだ目覚めない街にも

さえずりの輪唱 白んだ空に響いた

今日が始まる 人々の中にも

空を仰いで こうして時は送られてゆくんだね

きみはやがてわたしの知らないきみへと

せいちょうしてゆく

かこのわたしがてをふる

それはさよならのあいずではなく

はげましをもっておくりだしているのだ

とおもいたい

せいちょうしてゆくきみへ

あたらしいわたしへ

風の渡る丘

桜の翁が若葉を揺すり さわさわと歌う

針葉樹は天を指す梢を こうごうと唸らせ

イチヨウは囁くように 木の葉を震わす

見渡す空に 雨を含む雲が集まってくる

流れる風は身体をくるみ 次には過ぎ去り

時代（とき）を忘れる 風の渡る丘に立つと

眼下の谷間に今は 煩雑な街が横たわっていても

耳もとで鳴る 風の音は懐かしさを呼ぶ

悠久という 懐かしさを

~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*

ふと 目に映る
可憐な花 きれいな空の雲の形
心に触れる風景

覚えていたい ありのままに
感じた気持ちと一緒に
いつまでも そのままに

でも 明日には違う顔
記憶の箱もいい加減
風化する気持ち 止まらない

ファインダーを覗いて
私の目の代わりに
私の記憶の箱の代わりに

時を切り取り 仕舞っておこう
感じた気持ちと一緒に
いつまでも そのままに

インタラクション

水に手を浸し その冷たさを感じるとき 水の存在は際立ち

しずくは 光を反射し 踊ってみせているよう

誰も 水に触れるものなければ 水はただ在るだけで

飽き足らなかったのか 寂しかったのかと 人としては思うのだけど

触れるものの感覚が 触れたものを際立たせ

触れたものは 触れるものの感覚を際立たせるかのようで

柔らかな雨は 大きな翼のよう

大地をくるみ 降りそぼる

この街も包まれ その街に暮らす 私たちの心も包まれ

羽の下に まるで守られているように

こねこ

ずっとまえにはね
はらだたしかったことも
かなしかったことも
なんだかいまは
すーっと
どこかにのみこまれてゆく
きみといると
なにかがかわってゆくみたい
ずっとまえには
なかったきもちだから
きっと
きみのはこんできたんだね
ふしぎなんだ
しぜんなのかな
すこしくすぐったい
このきもち

ひねくれ者のウタ

病気 可哀想と憐れまないで
辛いのは現実でも
あたし 可哀想な人なの？

みんな そんな目で見ないで
もっと辛いところに追い込んでいるんだよ
わからないの？

きっと治って幸せになるよ なんて
安易に言わないで欲しいな
あたし今 不幸なの？

あれこれ無責任な民間療法情報ありがとう
たくさん お金を使いました

病に 人の言葉に 弱い心に
振り回されて 一回りして気がついたよ

治ることがベストだとは思わなくなった
そうしたら 病と上手く付き合えるようになったよ

得るより失う方が多いみたいだけど
得るものはとても大きいことを知った

今 生きていることが とてつもなく嬉しい

初秋

黄金色に染まる窓

秋に呼ばれた

どこかへ行きたいな

真っ青に高く突き抜ける空を見に

金色に光る野原を歩きに

風よ連れて行って

懐かしい風景の中へと

窓を開け放てば

目映い季節のひとこま

今しかみつけれない実を探しに行こう

風よ連れて行って

記憶に蘇る景色のなかへと

_*

道端

澄んだ青い花

転がる蝉の亡がら

寒さに咲いていた

昨日まで鳴いていた

どこか力強く

どこか儚く

ひだまり

冬の朝日の黄金色
部屋の中に満ち

柔らかな温もり
暖房のスイッチを切って
窓辺へ

レースのカーテンを透ける
樹々の淡い揺れる影の
繊細な模様

鼓動と呼吸を意識する

日溜まりに温もる
ただそれだけで

生きているという幸福

焰

焰みたい 想いは

酸素と 燃料をくべ

ゆっくりと 燃えている

この身体を芯にして

ときに 風に揺らめき

勢いを増したり

消えそうになったり

燃え尽きれば 残るすす

でもそれは もう私の思いではないから

独り歩きする言葉も 面影も

なにも残したくはないけど

キミの手に 思い出が残るなら

生きていたという 命の証し

それだけを胸に 灯して

あたたかなるひととき

なにか嬉しいことが起きるのを
知っているわけではないのだけど
なんだかとっても楽しい気持ちが
心の奥から湧き上がってくるよ

キッチンで料理するときはことさらに
食材たちがとても可愛らしく美しく見えてきて
その生立ちを思っありがとうございますなんて呟いたり
その横では子どもがニンジンの気持ちなんて言って
野菜を刻むたびに「イタイ、イタイ！」と
声をあげて代弁したりしているのだけど

それでもなんだろう
とってもあったかい
とっても柔らかな温もりがそこにある

なにか嬉しいことが起こるのを
知っているわけではないのだけれど
そうしてとっても楽しい気持ちが
心の奥から湧き上がってくるよ

_*

冬の朝に

朝が来ることを

疑うことなく 人は眠り

もう少し 毛布に包まっていたいなんて

眠たい目をこすり 始まる一日

いつから こうだったかな？

いつから 続いているのだろう

私という この感覚

永遠（とわ）にも感じる

振り返れば 思い出は瞬く間なのに

とても長遠に感じる

ゆっくりと回っているみたい

星の動きが 心時計の秒針になる

早送りの街時間を外れてみれば

木々の静かな呼吸音が 聞こえてくる

やわらぐ樹皮のしたの 命の躍動を感じつつ

最後まで目を通して頂きまして
ありがとうございます

詩抄 II ～ 日々記 ～

'98年-'04年の詩作品より

<http://p.booklog.jp/book/81116>

著者：鳴瀬羽迦

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kotobanote/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/81116>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/81116>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ